

## [音 楽]

# 児童が主体的にグループ活動に取り組む音楽科授業

－自己把握・課題設定・言語表現の視点から－

渡辺 知佳\*

### 1 はじめに

平成20年の学習指導要領改訂では、音楽科における改善の具体的事項として、「(ii)－(オ) 斉唱や簡単な合唱・合奏など全員で一つの音楽をつくっていく体験を通して、協同する喜びを感じたりする指導を重視する。」と記されている。それに対し、金本と坪能は「音楽科の学習では、児童が一つの目的に向かって同じ歩調で学習活動を進める場面が多く占めている。そこでは、集団の中で個々の個性を発揮しつつ、協調しながら互いに高め合う学習活動の充実が求められる。」と述べている。また、学習指導要領の中で高学年においては、「グループなどの集団における自分の役割を意識して活動できるようになる。そのため、児童が自己の思いや意図をもって表現することに加え、友達とともに考えるなどして楽曲の理解を深め、それを自分たちの音楽表現に生かす能力を身に付けることが重要となる。」と述べられている。つまり、高学年の音楽科授業では、グループ活動を通して、楽曲に対する思いや意図を伝え合い、よりよいものを求めて、互いに高め合いながら主体的に自分たちの音楽をつくり上げていく活動が求められている。

これまで、全体で響き合う合唱や合奏をつくり上げていく過程で、同パートで声や音色を合わせたり、異パートと声や音色を重ねたりする活動を行ってきた。しかし、これまでのグループ活動の様子を振り返ると、グループ活動が「ただ演奏するだけの時間」で終わったり、何をしたらいいかが分からず、活動が停滞したりする様子が見られた。また、たとえ表現において思いや意図をもっていてもそれを具体的な言葉にし、伝え合い、高め合うことはできなかった。これは、児童が明確な目標をもって活動することができなかったことや言語によって音楽に対する自分の考えを表現する力が未熟であることに起因する。これらを解決するためには、児童自身が自分の状況を把握して目標を設定したり、言語による具体的な表現によりお互いに助言し合えたりする力をつける必要がある。

音楽と同じく、自分の状況把握が難しい体育科では、木嶋(2012)が、ハードル走指導において、児童がどのようなフォームでハードルを越しているかを客観視するために、ビデオによる視覚的フィードバック制御と言語指示によるフィードバック制御を組み合わせた実践をしており、児童自身の自己把握や課題の明確化に成果があるとしている。音楽科でも同様に、児童自身が自分の状態を把握して評価することにより、自己の伸びや成果を実感したり、新たな課題を自覚したりすることができる。その実感や自覚が、「もっとこういう演奏をしたい。」「そのためにこういう練習をしよう。」といった課題を自らが導き出すことにつながり、目的意識をもって主体的にグループ活動に取り組む姿を育むことができる。

### 2 研究の目的

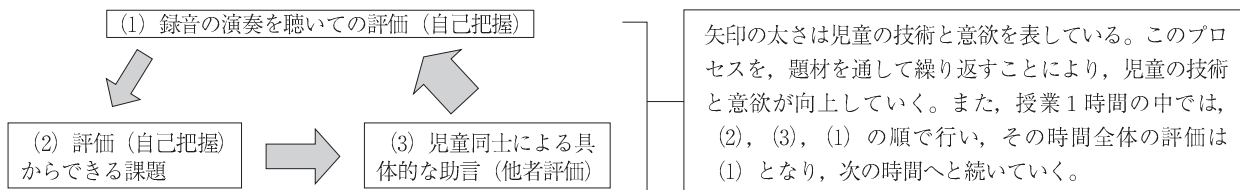
本研究では、小学校高学年の表現領域のグループ活動において、①自己把握により明確な目標を持たせること、②自己把握からできる課題を明確にすること、③自己の考えを具体的に言語表現する力をつけることにより適切な助言をしようことの3つのプロセスをスパイラル状に繰り返すことで、互いの考えを共感し合いながら主体的にグループ活動に取り組む力を育むことができることを明らかにする。

### 3 研究の方法

本研究では、小学校高学年の表現領域のグループ活動において、児童が明確に自己の課題を見出し、主体的に取り組むことができるよう、下記のようなプロセスを用意する。

---

\* 上越市立東本町小学校



(1) 録音の演奏を聴いての評価 (自己把握)

児童の演奏をその場で録音し、自己の演奏を客観的に聴き、より具体的な評価ができるようにする。そうすることで、児童はその時間にできたこととできなかったことを実感し、より具体的に言葉で表すことができると考える。また、グループ活動前の演奏と活動後の演奏を聴き比べることで、自分たちの伸びや変容を実感できるようにする。

(2) 評価 (自己把握) からできる課題

録音した自己の演奏を聴き、児童自身が自覚した改善点を課題として提示する。「○○をリコーダー奏しよう。」といった漠然とした課題であると、児童はグループ活動に見通しをもって取り組むことが難しい。そのため音程や発声、強弱や音の重ね方などと、「何に気を付ければよいのか。」「どの部分を聴いたらいいのか。」などを明確にした課題を提示する。自己の演奏から見出した課題であるため、児童はより課題意識と見通しをもって主体的に活動を進めることができると考える。

(3) 児童同士による具体的な助言 (他者評価)

児童同士が互いに励まし合ったり、教え合ったりすることで、自己の成長や課題を自覚し、表現力や意欲が高まる。これまでのグループ活動では、具体的な言葉で評価し合う方法が分からず、「できた。」「できなかった。」といった漠然とした感想で終わっていた。そこで、助言の型を提示し、具体的な評価をする手立てとする。また、助言の内容によってレベルを設け、全員がグループの中で声を掛けられるよう工夫する。

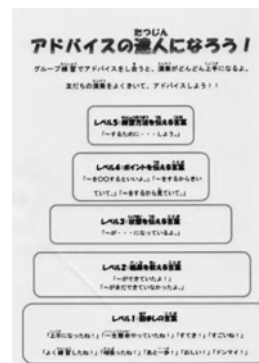


図1 助言補助掲示

4 授業の実際

実践1 第5学年(6月~7月) 題材名「いろいろなひびきを味わおう」

主題名『いつでもあの海は』(一部同声二部合唱)

『いつでもあの海は』の2時間目でグループ活動を行った。児童は、自分たちが主体的に進めるグループ活動は未経験であった。そこで、いくつかのグループ活動の型とねらいを教師から示し、下記のように一緒に進めていった。

- ① 4~5人の同パートグループで斉唱する…発声・音程を確認する。
- ② 違うパートグループ同士で聴き合う…他パートの旋律を知る。本時の課題と照らし合わせて助言をする。
- ③ 8~10人の合体グループで合唱をする…声の重ね方を確認する。

(1) 録音の演奏を聴いての評価 (自己把握) 2時間目

各パートとも、音程はよく取れていたが、強弱も表現の工夫もなく、メリハリのない演奏であった。児童は録音の演奏を聴いて、音程に自信をもって歌えたことと、強弱が付いていないことに気付いた。音の重なりについての意見が出なかったため、楽譜から分散部分と和声部分の重ね方の違いを紹介したところ、分散部分を「低い波が追いかけているみたいに歌いたい。」という意見が出た。強弱や表現の工夫に気付かなかった児童も、何回か繰り返して聴くことで、友達の言っていることが曲のどの部分のことなのかを理解することができた。

(2) 評価 (自己把握) からできる課題 3時間目

前回の評価から、強弱と分散部分、和声部分の重ね方に課題があった。そこで、強弱と声の重ね方を意識してグループ練習ができるよう、「強弱、声の重ね方を工夫し、海の様子が変わるように歌おう」という課題を提示した。強弱では、ただ強く、弱くではなく、「力強い波のように」「聴く人の心にささやくように」と歌詞の内容や聴き手を意識した言葉で示した。声の重ね方では、分散部分は「追いかける波のように」声を重ね、和声部分は「歌声を一つにして大空に届くように」声を重ねるよう示した。グループ練習の様子を見ると、強弱を意識して練習しており、ワークシートを見ても強弱の達成度

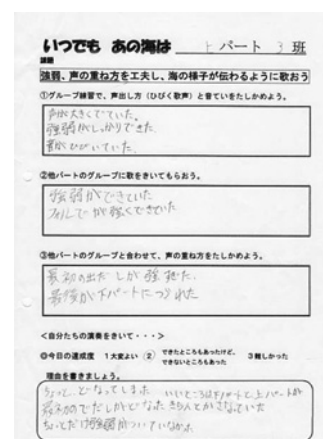


図2 児童のワークシート

は高かった。しかし、声の重ね方については、③の活動の中で、意識して取り組むことが難しかったようだ。要因としては、他パートの声につられないよう気を付けることに意識が向いていたこと、歌いながら自分の耳では確かめられないことが考えられる。このことから、指導者が一緒に歌ったり、鍵盤ハーモニカで音程を取ったり、歌う人と聞く人に分けることで、他者評価による具体的な助言を受け、歌うことに専念しながら徐々に他パートの声も聴きながら歌うことに慣れるようにしていきたい。

### (3) 児童同士による具体的な助言（他者評価） 3時間目

グループ内の振り返りでは、助言補助掲示の言葉を使いながら、励ましの言葉や具体的な状況を伝える言葉をかけていた。グループ活動でのねらいを明確に提示していたため、そのねらいに沿った助言を述べるグループが多かった。初めての試みであったためか、レベル1, 2の言葉がほとんどであった。

#### (1) 2 録音の演奏を聴いての評価（自己把握） 3時間目

グループ活動後に録音をし、自分たちの歌声を聴くと、「強弱はできている。」「1番の声の重ね方はあまりそろっていなかった。」「2番の『風も光るよ』はきれいに重なっていた。」などの声が挙がった。児童が自己の歌声を客観的に聴き、具体的に評価する上で、大変有効な手立てであったと考える。

#### 〈成果と課題〉

実践1を通して、(1)～(3)の有効性が見えてきた。しかし、(2)の課題については、児童がより明確に理解する言葉を吟味する必要がある。児童はまだグループ活動に慣れていないため、今後も題材の中で計画的にグループ活動を取り入れていく。

本題材「いろいろな響きを味わおう」では、同じ題材の中の器楽教材『リボンのおどり（ラ バンバ）』でも音の重なり方や音の響きについて学習をしたが、その学習で学んだことを生かそうとする言葉や行動が見られなかった。児童の意識は教材曲や各活動で途切れており、「いろいろな響き」を味わう学習のつながりや、題材を通しての伸びや変容が感じ取れないと考える。児童が題材を通しての伸びや変容を実感し、学び得たことを生かした具体的な言葉で言い表せるよう、以下の手立てを講じる。

#### (4) 題材を通した評価シート

多岐に渡る活動の中で、学習のつながりや、題材を通しての伸びや変容を感じ取れるよう、1つの題材につき、1枚の振り返りシートに自己評価を書き入れる。また、1時間の自己評価を書き入れる際には、曖昧な評価とにならないよう、その時間の課題に対して、自分たちの演奏はどうであったかを振り返ることで、自らの成果と課題を明確にする。

## 実践2 第5学年（10月）題材名「和音の美しさを味わおう」

### 主題名『それは地球』

『それは地球』の2, 3時間目でグループ活動を行った。

グループ活動が停滞しないよう、実践1と同様に活動の型とねらいを明確に提示し、下記のように進めた。

- ① 3～4人の同パートグループで斉唱する…3, 4段目の音程を確認後、「曲の感じ」を生かして歌う。
- ② チームで2パートずつ声を重ねる…正しい音程で歌う。
- ③ チームで3パートの声を重ねる…和音のバランスに気を付けて歌う。

実践1の反省から、②の活動では、2パートずつ声を重ね、残り1パートが聴き役となって助言をした。音が取れなかったり、活動が停滞していたグループには、指導者が一緒に歌ったり、鍵盤ハーモニカで音程を取るよう助言したりといった支援を行った。児童同士の関わりを見ると、聴き役の子が合図を出して歌い始めたり、歌ったグループが司会役として話し合いを進めたりする様子が見られた。

#### (1) 録音の演奏を聴いての評価（自己把握） 2時間目

2時間目は、前回の録音から、音程が取れていないことと、曲の感じが付いているように聴こえないことから、「横（音程と曲の感じ）に気を付けて歌おう」という課題を提示した。グループ活動後、全員での合唱を録音し、自分たちの歌声を評価した。その際、「音程は取れていた。」「怒鳴っていたところがあった。」「曲の感じを意識して歌っていた。」「和音がきれいに重なってなかった。」といった具体的な振り返りがあった。児童は次時の活動への期待を高くもつことができた。

#### (2) 評価（自己把握）からできる課題 3時間目

前時の実際の演奏を聴き、前時にできたことやできなかったことを、振り返りシートをもとに確認した。すると、

「音程は取れていたけど怒鳴り声のところがあった。」「和音がきれいに重なっていない。」という意見が出た。そこで、「横（曲の感じと音程）と縦（和音のバランス）を合わせた声の重ね方で3部合唱しよう」と課題を提示した。児童の振り返った反省が本時の課題につながるよう、課題を提示する際、「和音のバランス」を特に意識していくことをおさえた。（「縦」、「横」という言葉は本題材に限らず、授業の中で使用している言葉である。）また、前時で録音した演奏や評価シートを基に本時の課題を確認したことで、「音程に自信がないから怒鳴り声になっていたんだ。」「この和音のバランスに気を付けて演奏しよう。」と、課題と自己の演奏を具体的に結び付けて考えることができた。横と縦については、写真1のように板書でイメージをもてるようにした。



写真1 横と縦を表す板書

また、実践1と同様にグループ活動の型とねらいを示したことで、「何に気を付ければよいのか。」「どの部分を聴けばよいのか。」が明確となり、主体的に活動に取り組んでいた。

(3) 児童同士による具体的な助言（他者評価）3時間

実践1から「アドバイスの達人」を音楽室に掲示し、演奏後に互いに助言し合うよう支援してきた。児童は感想や自己の見取りによる助言を主張できるようになってきた。③のグループ活動では、「このチームは上パートが小さいから、もっと息を吸って。」「このチームは下パートが怒鳴り声になっているよ。」など、音のバランスや声質についての意見が多く出た。また、よりレベルの高い助言が言えるよう、相手の歌声に耳を傾け、積極的に助言をし合う様子が見られた。しかし、明らかに上パートの音量が小さく、和音のバランスが合っていない演奏に対し、「とてもバランスがよい。全体的にもっと音量をあげるといいよ。」と助言をしている児童がいた。



写真2 助言し合う様子

(1-2) 録音の演奏を聴いての評価（自己把握）3時間目

3つのグループ活動後に録音をした。実践1から録音を聴いての振り返りは継続して行っている。録音となると、児童は毎回緊張感をもって自分のできる精一杯の演奏をしようとする姿が見られた。録音した演奏を聴くと、「1番の『青い星』のところで歌声がきれいに重なっていた。」「1番の和音のバランスはよかったけど、2番は下パートが目立ちすぎている。」と、具体的に細かい部分にも気付くことができた。



写真3 録音の様子

また、次時では『それは地球』の最初の録音と聴き比べる活動を行った。児童は「前回より音程が正確になったから、きれいに声が重なったんだね。」「最初の演奏は曲の感じや強弱がないから、まっ平らな感じがする。」「和音のバランスに気を付けるために、他のパートの声も意識するようになった。」と感想を述べていた。最初の演奏と聴き比べることで、その時間の成果だけでなく、楽曲を通しての自己の伸びや成長を実感できたようだ。

(4) 題材を通した評価シート

題材の最初の記述を見ると、「できた。」「できない。」など漠然としたものも多かったが、次第に課題に応じた感想を書くようになっていった。さらに、曲の特定の部分について記述するなど、内容も詳しくなっていた。また、「それは地球」では、第5時よりも第6時の方がよい演奏であったが、児童の評価は低くなっている。これは、児童が楽曲に対する明確な視点を持ち、「もっとこういう演奏にしたい。」という気持ちが高まったためと考える。

振り返りや課題を提示する際、評価シートを見て前時にできたことやできなかったことを確認した。課題と自己の演奏を具体的に結び付けて考えることができ、児童が明確な課題意識をもつには有効な手立てであったと考える。合奏、合唱、鑑賞と多岐に渡る活動においても、児童は「和音」の響きや美しさについて考えていた。歌唱・器楽曲『静かに眠れ』で学習した和音を、『それは地球』の楽譜から見つけ、楽曲を超えて題材共通の「和音の響き」を意識していた。

振り返りシートの自己評価は以下のとおりである。（感想・理由は一部抜粋）

和音の響きを味わおう		名前 ( )
曲の感じ	達成度	理由・一言感想
フレーズを聴いて歌う		フレーズに気をつけて歌うと、あまりはよくなった。
和音を知り、曲に合わせて和音を選択する。		和音と曲の雰囲気を合わせて歌うと、とてもいい感じになった。
和音のうつり変わりを感じながら、歌ったり演奏したりする。		少し緊張して、うしろ向きに思っていた。
自分の歌		
音の響きや曲の感じを大切に歌う。		音程は、みんなに合わせることができた。とてもいい感じになった。
和音に合わせて声を出そう。		音程と曲の雰囲気を合わせて歌うと、とてもいい感じになった。
みんなでリズムを合わせ、ハーモニーで演奏する。		和音の響きを聴いて、とてもいい感じになった。
和音の響きに気をつけて、和音を選択する。		和音を聴いて、とてもいい感じになった。
音の響きや曲の感じを大切に歌う。		和音の響きを聴いて、とてもいい感じになった。

図3 児童の評価シート

〈第1時「静かに眠れ」課題：フレーズを意識して歌う。〉 〈第2時「静かに眠れ」課題：和音を知り、曲に合わせて和音を演奏する。〉

評価	人数(34人)	感想・理由
5	4人	口を大きく開け、フレーズの境目で息継ぎができた。 フレーズを意識して歌えた。
4	18人	フレーズを意識して歌った。 最初はできなかったけど、最後の合唱でうまくできた。
3	10人	フレーズを忘れてしまったときもあった。 意識していたけど、あまり上手ではなかった。
2	2人	上手に歌えなかった
1	0人	

評価	人数(34人)	感想・理由
5	10人	曲に合わせて3つの和音を演奏できた。 難しかったけど、自分で決めた和音は演奏できた。
4	17人	出だしが少しずれてしまった。 タイミングよく和音を演奏することができた。(鍵盤ハーモニカ)
3	5人	少し違う音が混じっていた。 和音を1つ吹くことができた。
2	2人	難しかった。 できなかった。
1	0人	

〈第3時「静かに眠れ」課題：和音の移り変わりを感しながら、歌ったり演奏したりする。〉

評価	人数(32人)	感想・理由
5	15人	歌ははっきりした声で歌えた。演奏も2つの和音を吹いた。 歌に合わせて和音を演奏することができた。
4	9人	少しあせてしまったが、3つの和音を演奏した。
3	6人	1つの和音は自信をもって演奏した。 歌が上手に歌えなかった。
2	2人	歌に合わせるのは難しかった。
1	0人	

〈第4時「それは地球」課題：曲の感じに合う歌い方を工夫する。〉

評価	人数(34人)	感想・理由
5	20人	曲の感じに合わせて歌えた。 上パートと中パートがシンクロしていた。
4	7人	上パートと中パートで声を重ねるのが難しかった。
3	4人	全体的に怒鳴り声になっていた。
2	2人	上手に歌えなかった。
1	1人	難しかった。

〈第5時「それは地球」課題：音程と曲の感じ(横)に気を付けて歌う。〉

評価	人数(34人)	感想・理由
5	15人	低いところもやわらかい歌声で歌えた。 音程、曲の感じに気を付けて歌えた。
4	10人	1番の「青い星」のところでみんなの歌声が重なっていた。 段々つられずに歌えるようになった。
3	8人	音程が少し不安だった。 つられないようにどなってしまった。
2	0人	
1	1人	うまく歌えなかった。

〈第6時「それは地球」課題：横と縦を合わせた声の重ね方で3部合唱する。〉

評価	人数(34人)	感想・理由
5	13人	音量の調整がうまくいって和音のバランスが取れた。 前回よりも和音の部分がそろっていた。
4	12人	上パートの音量に合わせて歌えた。 2番の「それは…」から和音のバランスが崩れた。
3	7人	声が小さかったから、もっと出したい。 (上パート) 後半で怒鳴り声のところがあつた。
2	2人	音程と曲の感じはできたけど、和音のバランスはまだまだ。
1	0人	

## 5 成果と今後の課題

### (1) 成果

2つの実践から、児童が主体的に進めるグループ活動の工夫を評価の視点で迫るために、以下の4点が有効であることが分かった。

#### ① 録音の演奏を聴いての評価(自己把握)

演奏を録音し、自己評価する振り返り活動を取り入れたことにより、児童は自己の演奏をよく聴き、その時間にできたことやできなかったことを実感し、より具体的に言葉で表すことができた。さらに、最初の時間の録音と最後の時間の録音を聴き比べることで、その時間にできたことだけでなく、楽曲を通しての自己の伸びや成長を実感することができた。

#### ② 評価(自己把握)からできる課題 3時間目

前時で録音した演奏や評価シートを基に、「自分たちの演奏でできていることは何か。」「できていないことは何か。」を振り返り、本時の課題と結び付ける作業が有効であった。これにより、児童自身が自覚した改善点を新たな課題として提示することにもなり、「もっとこんなふうになりたい。」という児童の意欲が高まっていくのを感じた。さらに、各グ

ループ活動で、「この活動では、何を確認するのか。」を明確にしたことで、どの部分をどのようにすればよいか具体的になり、グループ活動が「ただ演奏する時間」とならず、児童主体の活動に繋がったと考える。

### ③ 児童同士による具体的な助言（他者評価）

音楽室に助言の型を提示したことで、言葉で伝え合う方法が具体的に分かり、児童は進んで友達に助言をすることができた。また、1～5のレベルを設けたことで、全員が助言を述べることができた。さらに、「助言をする」という目的意識が他者の演奏をよく聴き、提示した課題の視点で評価することにも繋がった。また、他者から客観的な評価をもらうだけでなく、他者を評価することで、自己の成長や課題を自覚し、表現力や意欲を高めることができたと考える。

### ④ 題材を通した評価シート

その時間の課題に対して、自分たちの演奏はどうであったかを振り返ることで、自らの成果と課題を明確にすることができた。実践2では、歌唱・器楽曲『静かに眠れ』で学習した和音の構成や移り変わりを『それは地球』にも生かすことができた。本題材に限らず、一つの題材の多岐に渡る活動の中で、学習の繋がりが題材を通しての伸びや成長を実感し、学習に生かすには有効な手立てであったと考える。

#### (2) 今後の課題

グループ活動は、教育現場の音楽学習においても積極的に取り入れているが、限られた時数の中で効果的に取り入れていくには、題材を深く理解し、どこでグループ活動を取り入れるとより効果的かを吟味する必要がある。しかし、本実践では、題材の中でグループ活動の位置付けを明確にしていなかった。時数や題材の深い理解、個人練習の時間の確保に留意し、題材の中でグループ活動をどのように取り入れるかが今後の課題である。また、手立て③児童同士による具体的な助言（他者評価）において、助言の内容が常に妥当な内容であるとは限らなかった。指導者の適切な助言を適宜加えらるとともに、妥当な助言をするためのスキルが身に付くよう、意識して授業を進める必要がある。

## 6 おわりに

この実践から、自己の成果と課題を把握し、その時間の課題を明確にし、児童同士が具体的に助言し合うプロセスを、題材を通して繰り返すことで、児童が主体的にグループ活動に取り組むことに繋がることが分かった。

録音による自己把握と助言補助提示を用いた他者評価は、演奏を聴く意欲を高めていくことができた。現在6学年に進級した児童は、自己や他者の演奏をよく聴き、進んで具体的な言葉で評価し合っている。『星空はいつも』では、部分二部合唱の歌声とリコーダーの音色のバランスに気を付けて演奏をしていた。その際、作曲者の思いや意図を表現できる方法を考えるとともに、自らの思いや意図をもとに表現を工夫していく活動を行った。このことから、繰り返し実践することで、児童の意欲と技能が向上し、主体的にグループ活動に取り組むようになることが分かった。さらに、限られた時数の中でより効果的に取り入れることができるようよく吟味し、年間カリキュラムの中に明記したい。

題材を通した評価シートを用いることで、合唱、合奏、鑑賞と多岐に渡る活動の中でも、児童はその題材を通して学習することを意識して活動に取り組むことができた。4-(4)の結果から分かるように、達成度の数値は、結果を集計し、そこから児童の達成度を測るものではない。課題に対する自己評価を数値化し、その数値に対する理由を記述するためのものである。6学年で、5段階評価を外し、記述欄のみの評価シートを用いたが、児童の記述は、曖昧なものになる傾向があった。このことから、自己評価の目安となるものがあることで、より具体的な言語表現が可能になることが分かった。さらに、一時間一時間の学びが一教材に繋がりが、さらに題材を通しての学びに繋がるよう、評価シートを工夫していきたい。

児童が自らの力でより美しい表現を目指す自立したグループ活動に取り組むには、さらなる手立てが考えられる。今後は、多様な児童の実態に合わせた手立てを講じ、児童が思いや意図を伝え合い、よりよいものを求めて、互いに高め合いながら主体的に自分たちの音楽をつくり上げていくグループ活動を実践していきたい。

## 引用・参考文献

- ・金本 正武, 坪能 由紀子 『小学校新学習指導要領ポイントと授業づくり 音楽』 東洋館出版社, 2009年, 6～10pp
- ・木嶋達平 「視覚と言語を組み合わせたフィードバック制御によるハードリング動作のメタ認知指導の工夫」 教育実践研究第23集 上越教育大学学校教育実践研究センター, 2013年, 193～198pp
- ・文部科学省 「小学校学習指導要領解説 音楽編」
- ・文部科学省 「言語活動の充実に関する指導事例集 小学校版」